

戦うオヤジ 戦慄編 手にはギター



東京・上野の「アコースティックダイニングF」で熱唱する「戦慄編」メンバー。ピック(上部)は仲間の証し

生きがい再燃

会社や家族のために自分を犠牲に生きてきたオヤジたちが、もう一度学生時代に熱中したギターを演奏しながら、人生を楽しく過ごそうという集まりがある。その名も「戦うオヤジの応援団」。会社や金に頼らない定年後の「豊かな生き方」の提案でもある。

土曜日の午後、御徒町のフオーク酒場で開かれた練習会。たばこの煙が立ち込める店内に十七人のオヤジが集まった。この日は福井県の仲間も参加。お互いを深くは知らないが、あだ名で呼び合う。メンバーは順番にステージ

発起人の山下浩司さん



(即興的な演奏)を入れたり、コーラスにも参加する。三年前から通う常連のコマリオさん(五五)は「ここに来ればみんな仲間になれる。会社みたいなストレスもない。息抜きでもあり、生きがいでもあります」と魅力を語る。ギター歴も動機もさまざまだが、みんな生き生きとしている。世話役のS・Sさん(五五)は「子どもが親離れたらぼろぼろ心に穴が空いた。何を樂しみに生きていこうかと、二十五年ブランクがあったギターを始めたら、打ち込めた」と話す。発足は二〇一〇年十月。発



演奏に聞き入る参加者

毎月各地で練習会「ライフワーク」

下浩司さん(五五)は当時、中高年の自殺者増加を取り上げるニュースに衝撃を受けた。「学生運動をやっていた連中が体制の中で生活を守るために我慢ばかり。なんとかできないか」と思い立った。インターネット上で仲間を募ると、元ギター少年のオヤジが次々、名乗りを上げた。現在の登録数は約千二百人になる。当初は、演奏できるフオーク酒場が少なかったが、今では全国に十数カ所の「たまり場」を確保し、毎月各地で練習会が開かれている。練習会といってもステージに立って人前で演奏する。それだけに、恥ずかしくない演奏をしよつと、各自が練習に励む仕組みだ。

応援団が目指すのは「定年後の人生をいかに充実させるか」。ギターをライフワークにして真剣に取り組むことで、定年前の「助走期間」の四十一〜五十代に「仕事人間」から「魅力ある人間」にシフトさせる狙いがある。

「退職金もままならない今の世の中、金を頼りにしたら定年後は不安しかない。四十年代で始めれば、八十歳には相応づまくなっている。価値観を変えて、「おれ、こんなにギター弾けるんだぜ」でいいじゃない」と山下さんは笑う。

文・比護正史／写真・坂本亜理理／紙面構成・松島英二